

不妊治療後妊婦の妊娠初期の体験

西病棟 5 階 ○岩坂咲子 宮森庄子 加藤綾子 紙尾千晶 古田ひろみ

Key words ; 不妊症 体外受精 妊娠初期 体験 心理

はじめに

近年、生殖補助医療進歩に伴い、不妊女性が妊娠に至る確立が高まってきている。不妊治療は、治療を受ける女性の身体的苦痛のみならず、妊娠に対する期待と焦り、流産、周囲からの言動など、心理・社会的側面にも苦痛をもたらすと報告されている。

当院は特定機能病院として生殖補助医療を行っているため、看護をする機会が多く、今後も増加していくことが予測される。健やか親子 21 には不妊への支援が課題として挙げられており、カウンセリングなどを通じた不妊治療中の支援体制が整えられてきている。しかし、不妊治療後に妊娠した女性の支援については十分に明らかにされていないのが現状であり、日々の看護に難しさを感じている。不妊治療の有無に関わらず、妊娠各期を通じて妊娠初期に最も不安が強い²⁾と言われており、この時期の精神的な援助の必要性は大きいと考えられる。しかし、不妊治療後妊婦の妊娠初期の体験に焦点を当てた研究は少ない。

そこで今回、不妊治療後の女性の体験を知り、どのような思いを抱きながら妊娠初期を過ごしているのかを明らかにしたいと考えた。

I. 研究目的

不妊治療を受け、妊娠に至った女性の妊娠初期の体験を明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2. 研究の対象

不妊治療によって妊娠した妊娠初期の初産婦

3. データ収集

先行研究を参考に、インタビューガイドを作成し、プレインタビューを行った。それをもとにインタビューガイドを修正した。

「現在、安定期に入って、率直に思うことはどん

なことですか。」という質問をきっかけに、不妊治療を受けて妊娠に至った妊婦の妊娠初期の体験を語ってもらった。面接内容は同意を得た上で録音し、逐語録を作成した。

4. データ収集期間

平成 18 年 8 月

5. 分析方法

得られたデータは、質的に内容を分析した。妊娠初期の体験や思いにあたる部分を注意深く読み取り、コード化した。コードは内容の意味を吟味し、研究者間で一致するまで十分に検討してカテゴリ分類した。また、分析内容の妥当性を得るために、母性看護の質的研究経験者からのスーパーバイズを受けた。

6. 倫理的配慮

対象者には、本研究の目的、プライバシーの保護、研究協力は自由意志であること、協力の有無や中断によって不利益が生じないことを文書にて説明し、同意を得た。本研究では、過去の苦痛を思い起こして語ってもらうことも予測されるため、精神的なケアが必要と判断された場合の体制を整えた。

7. 本研究での用語の定義

不妊治療；妊娠を目的に行う体外受精。

妊娠初期；胚移植後から妊娠 22 週未満。

III. 結果

1. 対象の背景

研究協力が得られた 3 名。年齢は 29～38 歳、妊娠週数は 16～21 週、不妊歴は 2 年～10 年で、治療期間は 1～3 年であった。そのうち 1 名は双胎妊娠であった。インタビューは病棟面談室にて実施し、面接所要時間は 1 名につき約 30 分であった。

2. 不妊治療後の妊娠初期の体験

対象者 3 名の語りを分析した結果、12 のサブカテゴリーが抽出でき、さらにこれらのサブカテゴリーから【妊婦になれないかもしれない恐怖との戦い】、【妊婦の仲間入りをしてうまれる新しい感覚】、【「普通でない」妊婦という感覚の中での揺らぎ】の 3 つのカテゴリーが導き出された。

以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを
(), 語りは「 」で示し、語った対象者
をA~Cとした。

1) 【妊婦になれないかもしれない恐怖との戦い】

このカテゴリーは、妊娠が成立し、継続していくという順調な経過から逸脱するかもしれないという脅威を常に感じながら生活している状況を指し、【妊婦になれないかもしれない恐怖との戦い】と表現できた。

不妊治療においては、受精卵を子宮内に戻す胚移植を行った日から14日後が最初の妊娠判定日となる。その間の、「出血があったんです、地獄ですわ。」(C氏)と語られるように、〈妊娠成立するかという恐怖との戦い〉の日々を過ごしていた。さらに、妊娠成立の判定後も、過去の不妊治療や流産体験から、常に〈流産体験や不妊治療による流産への不安〉と隣り合わせであり、「妊娠成立を言われても、まず不安だったんです、ダメになるかもっていう…。」(A氏)と妊娠が実感できるまでの思いを語っていた。その不安が、「流産するのも嫌やし、仕事は辞めた。」(B氏)という、〈流産しないための対処行動〉としての生活の変化をもたらし、流産という危機状態を回避するための選択をしていた。

2) 【妊婦の仲間入りをして生まれる新しい感覚】

このカテゴリーは、不妊治療を終え、妊婦になれたことを実感し、ようやく妊娠という通過点を迎えて感じる【妊婦の仲間入りをして生まれる新しい感覚】と表現できた。

不妊治療後、妊娠継続している段階で、ホルモン剤や止血剤の内服や不妊専門病院への通院は、不妊治療の続きとして認識され、「不妊専門病院を卒業したときに、はあー私も、うまくいったら赤ちゃん抱けるかもって。」(C氏)と語られるように、自分を取り巻く状況の変化から〈不妊治療の終了を機にうまれる妊婦としての実感〉が湧き上がっていた。そしてこれまでの、妊娠できるか、妊娠継続できるかという自分の体への関心から、「安定期に入って、流産への怖さから赤ちゃんが元気に育ってほしいという違うものになった。」(A氏)、「生まれるまで何があるかわからないから、先のことはかり不安。」(B氏)と語られるように〈児への意識の芽生え〉や〈今後の経過への不安〉へと意識が変化していた。それらが、「会社の人とか“子供まだか?”みたいな周りの目があつたし妊娠してほっとした。」(B氏)と語られ、〈治療の成果としての妊娠への安堵〉へと導いていた。

3) 【「普通でない」妊婦という感覚の中での揺らぎ】

このカテゴリーは、自然妊娠の妊婦と比較し、不妊治療による妊娠であるという事実と向き合って生活していく中で、不妊体験に基づく否定的な感情と、肯定的な感情の迫間を行き来しながら生活している状況を指し、【「普通でない」妊婦という感覚のなかでの揺らぎ】として表現できた。

医師からの妊娠判定を受けても、「出来るわけがないと思っていたから、妊娠を言われても、すぐにはよくわからなかった。」(A氏)などの語りから、〈不妊体験から妊娠を実感できない自分〉として表現されていた。「みんな自然に妊娠してるように見えて、やっぱり自分は特別なのかなっていう思いから抜け出せない。」(C氏)のように、自然妊娠を「普通」と捉えて自分と比較し、〈「普通」の妊婦とは違う感覚〉が意識の中に常に存在していた。その一方で、「今は治療してきたって思いはないですね、そういえばしてたねって。」(A氏)のような〈不妊である自分との別れ〉や、「自然妊娠の人たちより命ができる過程が神秘的だと感じる。」「私は勉強もしたし知識もあるし、ちょっとは勝ってる気がする。」(B氏)など、自然妊娠した妊婦よりも妊娠の知識があると自分を評価していた。そこに自己価値を見出して、〈不妊治療の経験を肯定的に捉える自分〉として語られるなど、過去の不妊体験に対する相反する感情や考えが共存していた。また、「主人のお姉さんが体外受精で男の子を授かって、自然妊娠じゃなくても着床してしまえば普通の妊娠と一緒になんだよって教えてくれてるような気がした。」(B氏)との語りに代表されるように、出産し子育てをしている周囲の不妊治療体験者の存在は、〈不妊治療から出産に至った女性から得られる励み〉として受け止めていた。

III. 考察

不妊治療後妊婦の不安に関する研究は、内容が様々であり、一致した結果は得られていない³⁾。また、不安のみに焦点をあてられているものがほとんどであり、妊娠初期の体験は十分に明らかにされているとは言えない。そのような現状を踏まえたうえで、不妊治療後妊婦の妊娠初期のケアを深めていくことができるよう、本研究で明らかになった妊娠初期の妊婦の体験を考察していく。

Gonzalez, L.O.⁴⁾は、不妊体験の一つとして、親になることの喪失への悲嘆を挙げている。また、西脇ら³⁾は不妊女性のストレス因子として、生殖能力の喪失からくる母性機能の劣等感を挙げており、不妊

女性は何らかの喪失体験をしていると思われる。そのような体験から、流産や妊娠できないということに過敏に反応し、油断できないという、不妊治療後妊婦の【妊婦になれないかもしれない恐怖との戦い】につながっていたと考えられる。さらに、妊娠判定で陽性の結果が出たとしても、妊娠継続できるかどうかは不確かなものとして捉えられていた。不妊治療における経過や結果、妊娠に関する不確かさは、不妊治療を受ける女性の苦痛である¹⁾といわれている。不妊女性はこれまでの不妊という喪失体験から、妊娠できないという脅威に対する予期的悲嘆を繰り返し、不確かさに対応していた。そのため、妊娠の判定を受けてもすぐには妊娠を実感できず、妊娠しても、次は流産するのではないかという新たな予期的悲嘆が生じていた。そのような予期的悲嘆を繰り返しながらの日常生活が、恐怖という表現につながったと考えられる。

不妊女性に限らず、妊娠を実感し妊婦としての自分を受容していく過程は、自己概念の再形成のはじまりと言える。自己概念は社会的経験の統合であり²⁾、不妊治療後妊婦の不妊経験は、妊婦としての体験や自己概念に影響すると考えられる。【妊婦の仲間入りをして生まれる新しい感覚】は、上記のような予期的悲嘆を繰り返す中での生活で、不妊治療中は想像できなかった感覚であり、妊娠を実感する中で、少しずつ気持ちが解き放たれて、感じられるようになるものであったと推察される。一般的に、妊娠初期は、妊娠の喜び、幸福感とともに当惑や不安も感じるアンビバレンスな状態であり、それが母性意識や母性行動の発達へとつながると言われている³⁾。不妊治療後妊婦も、妊娠の実感とともに、その感情を体験していた。しかし、不妊治療後妊婦の不妊治療における経験を考慮すると、それらの感情は自然妊娠の妊婦に比して、揺れが大きいのではないかと考えられた。

女性の生き方が多様化する中でも、日本では古くから「結婚して3年、子なき嫁は去る」といわれるような家や跡継ぎという風習が根強く残っており、女性は結婚して子どもを産むという社会からの期待が、圧力となっている。そのような中で、不妊治療を受け、治療目的であった妊娠が達成できたにもかかわらず、自然妊娠の妊婦と比較しながら妊娠生活を過ごしていた。それは不妊治療を乗り越えてきた妊婦は自尊感情が低下している⁴⁾との報告から、不妊治療中の喪失体験は、妊娠しても解決するわけで

はなく、過去の不妊体験が意識の中に存在しつづけていることが示唆された。

しかし、その一方で、「危機的状況のなかで様々な悩みを抱えつつも、自分なりのやり方で取り組み、時には不妊を肯定的な体験に変えていく」⁵⁾という、不妊治療中の女性を対象にした長岡の研究と同様に、不妊治療をしていた自分に価値を見出し、肯定的に捉えるという、自尊感情の低下とは相反する側面も持ち合わせていることが明らかになった。それは、妊娠後も危機的状況に対応する柔軟な力や自分の体験を意味付けられるという強みを持っていることであると解釈できる。このことから、妊娠初期において不妊治療後妊婦は、妊婦への自己概念の変革が迫られる中で、自然妊娠と比較しながら、不妊治療後妊婦であることを肯定的にも否定的にも捉えていた。そして、その両者を行き来しながら、【「普通でない」妊婦という感覚の中での揺らぎ】を経て、不妊であった自分から脱却し、妊婦としての自己概念を形成しようとする段階にあると考える。

自然妊娠においても、妊娠は危機的状況であり、自己概念の変革を迫られるという、女性のライフサイクルにおけるプロセスである。これから、不妊治療後妊婦の増加が予測される中で、ひとりひとりの妊娠経過や背景に個別性があることに加え、このような不妊治療後妊婦の体験を理解し、共感できる看護を実践していきたい。

IV. 研究の今後の課題

本研究では対象者が3名と少なく、一般化には限界がある。今後、対象数を増やし検討する必要がある。

V. 結論

不妊治療後妊婦の妊娠初期の体験として、【妊婦になれないかもしれない恐怖との戦い】、【妊婦の仲間入りをして生まれる新しい感覚】、【「普通でない」妊婦という感覚のなかでの揺らぎ】の3つのカテゴリーが導き出された。

それらの3つのカテゴリーには、不妊治療中の体験が強く影響しており、不妊と妊婦という感覚から妊婦へと変化していく段階で、妊娠初期に特徴的なアンビバレンスな感情も考慮し、不妊治療中の背景を理解したうえで、共感し、寄り添う看護が示唆された。

表1. 不妊治療後妊婦の妊娠初期の体験

カテゴリー	サブカテゴリー	主な語り
妊婦になれない かもしれない恐怖 との戦い	妊娠成立するかという恐怖との戦い	<ul style="list-style-type: none"> 胚移植してから妊娠判定までの2週目は、どう見ても生理になるって、泣いてるんです 判定日の2日前に出血があったんです、地獄ですわ 判定日の診察は、震えるっていうか、座ってられない
	流産体験や不妊治療による流産への不安	<ul style="list-style-type: none"> 今でも流産するんじゃないか心配 きばったら流れる、絶対おなかには入れられない 出血があり、ホルモン剤などの薬を続けた期間は「流れるかもしれない」と思っていた 何回も流産したから、赤ちゃんが育っていくのか心配 妊娠成立って言われても、まず不安だったんです、ダメになるかもっていう... 安定期に入るまでは、そういう怖さはずっと付きまとうんだと思う、それは仕方ないかな
	流産しないための対処行動	<ul style="list-style-type: none"> 流産するのも嫌やし、仕事を辞めた 受精卵移植後の2週間は妊娠中と同じような気の遣い方、安静にっていう生活 風水とか盛塩とか、やり始めてから妊娠したので、いまだに止められない
妊婦の仲間入り をして生まれる 新しい感覚	不妊治療の終了を機に生まれる妊婦としての実感	<ul style="list-style-type: none"> 不妊専門病院を卒業したときに、はあー私もうまくいったら赤ちゃん抱けるかもって 実感ま...薬とかシールとか使ってたんですよ、そういうのが終わってからかな 薬を飲まなくてもよくなって、妊婦として居られるようになった
	児への意識の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> 前向きに、無事に生まれて欲しい、ただそれだけ 安定期に入って、今度は赤ちゃんが元気に育ってほしいっていう望みに変えて
	今後の経過への不安	<ul style="list-style-type: none"> 双子だから、やっぱり小さく生まれてしまうんじゃないか 妊娠前から薬とか飲んでるし、その影響とか多少なりとも気になる 安定期に入って、無事出産、育児できるか、安心よりは不安のほうが大きい 生まれるまで何があるかわからないから、先のことは不安
	治療の成果としての妊娠への安堵	<ul style="list-style-type: none"> 無事妊娠できてよかった、それにつける 旦那はあんまり体外受精に乗り気じゃなくて、私が覚悟してやらせたから、できてよかった 会社の人とか「子供まだか？」みたいな周りの日があったし妊娠してほっとした 率直に、治療を再開してよかった 妊娠しているといわれたときは、実感がわいたっていうよりも、ほっとして泣いた 待合室とかでは喜んだりできないけど、うれしくて携帯開いて旦那にメールを送った
「普通でない」妊婦 という感覚の中での揺らぎ	不妊体験から妊娠を実感できない自分	<ul style="list-style-type: none"> ずいぶん長い間子供が出来なかったので、うそみたいな、実感が沸かない やっぱりだめかなと思って診察に行ったから、とりあえず驚いた 出来るわけがないと思っていたから、妊娠と言われても、すぐにはよくわからなかった
	「普通」の妊婦とは違う感覚	<ul style="list-style-type: none"> 普通の妊婦さんより出血しやすいとかあるし、普通の妊婦さんと一緒とは思ってないかな 普通の妊婦じゃないから私は頻りに診察に行かなければならぬんだ みんな自然妊娠してて若くていいなって思って、自分は特別なかなっていう思いがまだ抜けない
	不妊である自分との別れ	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠した今は、不妊治療のことは忘れて「そういえばしてたね」って思う 今はもう不妊治療をしていたっていう感覚はなくなった 母子手帳交付用紙をもらった時おなかのこの子に100%、120%気持ちがいっぱいって感じる
	不妊治療の経験を肯定的に捉える自分	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠について勉強もしたし知識もあるし、赤ちゃんへの意識が高い分、他の妊婦より勝ってる気がする 自然妊娠の人たちより、命が出来る過程が神秘的だと感じられる 苦勞を苦勞と思うのが好きじゃないし、いい経験だったな
	不妊治療から出産に至った女性から得られる励み	<ul style="list-style-type: none"> 姉ちゃんが不妊治療してて、出産もしてるから、勉強にもなるし支えになってるかな 主人のお姉さんが体外受精で男の子を授かって、自然妊娠じゃなくても着床してしまえば普通の妊娠と一緒になんだよって教えてくれたのが良かった

引用文献

- 1) 長岡由紀子：不妊治療を受けている女性の抱えている悩みと取り組み、日本助産学会誌 14(2), 18-27, 2001.

参考文献

- 2) 新藤幸恵, 和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア, 医学書院, 1996.
 3) 西脇美春, 神林玲子, 笹伊久美子：不妊治療後妊婦と自然妊娠妊婦の不安と自己受容性および胎児感情などの縦断的比較 妊娠初期～産褥 6ヶ月, 山梨医科大学紀要, 2002.
 4) Gonzalez.L.O. ; Infertility as a transformational process : a framework for psychotherapeutic support of

infertile women, Issues in Mental Health Nursing, 21, 619-633

- 5) 大村紀子他：不妊治療後妊婦の妊娠初期の抑うつ状態および胎児感情に関する調査, 神戸市看護大学短期大学部紀要 22号, 119-124, 2003.
 6) 五十嵐世津子, 森圭子：不妊治療を受けている女性の日常生活における対処, 日本助産学会誌 19(1), 64-70, 2005.
 7) 青木康子, 加藤尚美, 平澤美恵子：第3版助産学大系 8 助産診断・技術学Ⅱ, 日本看護協会出版会, 2003.